

アジア政経学会 2024 年度秋季大会 分科会題目：大平正芳の中国・東アジア外交

パネリスト：横山雄大（東京大学大学院博士課程、会員）

パネル報告タイトル：「中ソ対立下における日中ソ関係と大平正芳の対中・対ソ外交—中ソの対日原油輸出政策に注目して—」

報告要旨：

1970年代前半、対立関係にあった中華人民共和国とソビエト連邦は、相手に対して優位に立つべく、対日関係の改善に動いた。中ソが対日関係改善のための有効な手段の一つに位置付けていたのが、経済協力、とりわけ原油輸出であった。このように、中ソは対日関係において、政治的にも経済的にも競合していたのである。しかしながら、結局のところ、中国が政治・経済の両側面における対日関係の大幅な改善に成功した一方で、ソ連はこれに失敗した。そこで本報告では、なぜこのように中ソ間で明暗が分かれたのかを明らかにすべく、1970年代前半当時に注目を集めていた対日原油輸出をめぐる日中ソ関係に注目して、中ソの対日政策、及びそれに対する日本側の対中・対ソ外交の対応を検討する。

1972年の日中国交正常化にもかかわらず、ソ連外務省は中国への対抗のために、原油輸出を通じた対日関係改善に積極的な立場を採っていた。というのも、1972年に訪ソした大平が、日中が国交正常化を契機にソ連への対抗のために協力を進めるのではないかとソ連側の疑念を解くことに成功したからであった。しかし、ソ連外務省はブレジネフといった最高指導者レベルでの支持を調達できなかったため、ソ連国内での内部調整に失敗し、日本側が期待したような対日原油輸出を行うことができなかった。また、ソ連側が日中間の原油取引に強硬に反発したことは、日本側財界の不満を惹起した。他方で、中国は周恩来といった最高指導者レベルの指示に基づき、ソ連への対抗のために対日原油輸出を実施した。そのため、日本側の要望に応じて、中国は少量ながらも安価かつ速やかに対日原油輸出を実現することができた。また、中国側が日ソ間の原油取引に対し表立って反対しなかったことは、日本側財界から好感をもって受け止められた。

このように、中ソ対立という政治的要因よりも輸出用原油の不足という経済的要因のために、ソ連は対日原油輸出を思うように行うことができなかった。他方で大平は、日中国交正常化に関するソ連の疑念を解くことには成功したものの、原油輸出に関してソ連の翻意を促すことには失敗したのである。また、日本側財界は結果的に対中傾斜を強めていったものの、原油取引を開始した当初、中ソのいずれか一方だけに接近するのではなく、双方との関係構築に努めていた。